
GOD/EATER/BURST - NPCのお話 -

Huron

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GOD / EATER / BURST - NPCのお話 -

【Nコード】

N0954Q

【作者名】

Huron

【あらすじ】

かつて超巨大アラガミノヴァを使い「終末捕喰」をわざと引き起こし選ばれた

人間のみを生き残す「アーク計画」を止め、アラガミ化したリンドウを救った

フェンリル極東支部初の新型ゴツドイーターと言われた

第一部隊の隊長は今は用事で極東支部にはいない。^{リーダー}

残った極東支部のゴツドイーターはそれでもアラガミと戦う。

（リーダーがいないと戦えないわけじゃないけどね）

GOD EATER BURST ～NPCのお話～ 第一話（前書き）

注意

本当のキャラクターと口調が少し違うかも知れません。
そうだと思うたらごめんなさいorz

GOD EATER BURST NPCのお話 第一話

「リンドウさん！」

アリサがそう叫んだ。

「任せろ！」

リンドウは目の前にいる弱ったヴァジュラに対してとどめをさした。

アリサが倒したヴァジュラのコアを取り終わったのを確認して、リンドウはいつも通りに言った。

「おう！全員生きてるか？」

「……………」

「……………どうしたコウタ、元気がないぞ？」

いつもならうるさいほどに元気いっぱいのコウタが暗いのでリンドウは声をかけた。

「なんか……アイツがいないとここまでアラガミに

苦戦するなんて……思わなくて……ウロヴオロスとか・

ハンニバルとか今まであいつのおかげで倒せてたんだなって思っ

てさ」

「……………今頃何してるんでしょうね……………リーダー」

「どうした、どうした、元気がないぞお前ら、確かにアイツがいなくて

悲しいのはわかるが死んだわけじゃないんだ、元気だせ？ なっ？」

この理由は二日前

役員区画

「あの、リーダー見かけませんでした？」

その後アリサはツバキに頼んでリーダーの部屋にあるユニットを取りに行きました

「アリサが変だった理由はこれか……」

「私のヴァルキリー……！よかった戻ってきて……！もう離さないわ！」

「……………」

GOD EATER BURST NPCのお話 第二話

「サクヤの部屋」

「失礼するよ」

そういつて入ってきたのは、ペイラー・サカキであった。

「サカキ博士・・・どうしてこちらに？」

「ここにアリサ君とコウタ君がいると聞いてね、二人はどこかな？」

「二人なら今飲み物を買いにいってますよ」

「行き違いをしてしまったようだね・・・」

その子がリンドウ君とサクヤ君の子供だね・・・

このご時世になって、二度も赤子をみる事ができるなんてね、少し感動だね・・・

名前はたしか・・・」

「レンですよ、忘れないでくださいね」

「それはすまなかった、たしか、リンドウ君が付けた名前だね・・・」

「うむ、あのリンドウ君がここまでいい名前を付けるとは

実に興味深い・・・

私にはセンスがいい名前というのはどういうものなのかは

わからないがとてもいい名前だと私は思うよ。

ヨハネスと同じように父親にして夫となると

なると変わるものだねえ・・・」

「サクヤさん、飲み物かってきましたよってサカキ博士!？」

「どうした〜ってサカキ博士がなぜここに!？」

「君達に用があつてきたのだよ。正確には第一部隊全員だがね・・・
コウタ君、リンドウ君とソーマをここに
呼んでくれないか？恐らくエントレスにいると思うのだが・・・」

「わかった、呼んでくるよ」

そういつて、コウタは部屋を出た。

しばらくして

「お〜う！今ついたぞ！」

「・・・・・・・・・・」

「うむ、全員そろつたようだね、では用件を言おう。
今、第一部隊にはリーダーがいないのはみんな知ってるね。
向こうでは結構苦戦してるらしくてね。
当分帰ってこれないようだ。

なので、本部から二名神器使いが来るそうだよ、変わった二人らしいから
楽しみにしておくといいよ、用件は以上だ、私は用事があるので失礼する」

サカキはそういつて、出て行つた。

「変わった神器使いですか・・・それは楽しみですね・・・
リーダーが当分帰ってこれないのは残念ですけど・・・」

「中身まで変わったやつじゃないといいけどな……」

「まあ、俺達は俺達の仕事をするまでだ、そんな深く考えなくていい、じゃあ解散だ！」

GOD EATER BURST ～NPCのお話～第二話（後書き）

どうも霧裂黒雨です。

なんかリンドウさんが真面目すぎる気がしてなりません、

僕の中のリンドウさんはもう少し不真面目な印象があるのですが・

・

それはそうと、やはり口調が難しいです。

似てなかったらすみませんorz

GOD EATER BURST ～NPCのお話～ 第三話

「俺が今日から配属となったアルイカだ、よろしくな」

「ブライトだ・・・よろしく」

本部からきたという変わったゴットイーターは挨拶をすませた。

「ねえ・・・俺の部屋どこ？」

とブライトがツバキに聞く。

「お前達の部屋なら役員区画に二つ部屋が空いてるから

そこを使ってくれ」

「どもつす」

そういうとブライトはエレベータに向かい、役員区画に行った

「初対面なのにすみません、ツバキさん

あなたのほうが位は上なのに、あんな態度で相棒としてすみません」

「それはいいさ、それよりもすぐに部屋に行くなんて体調でも悪いのか？」

「いや・・・あいつはただのニートでミッションと飯以外は滅多に部屋から出なくてな、連れてくるのに一苦労だ」

「……………ニートって……………」

コウタがつぶやいた。

その時、エレベータからソーマが降りてきた。

ソーマがアルイカと顔を合わせると

「……………お前……………人間じゃないな」

といった。

「って初対面でそれ!？」

コウタが突っ込みを入れるが

アリサとリンドウはポカーンとしている

「へえ〜よくわかったな、でも半分はずれた。

俺の体の半分はちゃんと人の血と肉でできている。

半分はアラガミ細胞だけだね」

「ええええ!!」「そいつはすごい」

リンドウとアリサが同じタイミングでいう。

「君がアルイカ君か……………話には聞いていたが……………
実に興味深い……………」

そういつて出てきたのはサカキ博士である。

「話ってなんですか博士！」

「うむ、本部に人型アラガミと人間の子供がいると聞いてね」

「人型って・・・シオちゃんみたいな感じのですか？」

「うむ、特異点ではなかったようだが、人の理性を持った男性のアラガミだよ」

「俺の親父はすごいんだぜ！たしかに人型アラガミだけど、

人間の女に人気のあるくらいかつこよくて、物凄い強いんだ！」

「つよいつて・・・」

「貴方のお父さんって戦っているの？」

アリサがそう質問した。

「俺の親父はさ、人型とマジなアラガミの姿になれるんだよ。

たしか・・・ハンニバルだっけ？その姿の名前、色は赤」

「なんですか！それ！あのハンニバルですか？」

「こっちでもハンニバルでたのか？まあいいや、とにかくよろしくな」

アルカがそういうと、ほかのみんなも「「「よろしく」「」と言った。

「アルイカさん、ブライトさん」

その二人の名前を呼びながらエレベータからリツカが降りてきた。

「ブライトはいない、話は俺が聞くぜ、どうした？」

「そうですか、といっても用があつたのはアルイカさんですけど」

「??？」

「ブライトさんの神器は無事送られてきましたが、リアスさんのが見当たらないんです」

「ああ、それなら心配ないぞ、俺は神器を持ってないからな」

「「「ええええ!!」「」」

一同同じく声を上げた。

「神器がないって・・・どうやって戦うんですか?」

「ああ、こうやってだ、少し下がってくれ」

その場にいた者全員がアルイカから離れる。

「はあああ!!」

「アルイカが気合を込めると、両手にハンニバルと同じ炎の剣が現れた。」

「それって・・・ハンニバルのあの剣!？」

「俺の親父がハンニバルになれるっていったろ？」

俺はハンニバルになれないけど炎の剣なら出せるぜ？

あと槍もな」

「リンドウさん、できます?」

「・・・無理」

「まあ、つてことであれ?」

リアスの腕をサカキが掴んだ。

「実に興味深い・・・スターゲイザーといわれた私には調べざるを得ないよ・・・来てくれるかな?」

そっついながらすでにエレベータへと移動している。

「え?ちょちょまうわあああ」

「終わったな・・・あいつ・・・」

とソーマが一言いった。

G O D E A T E R B U R S T ～ N P C のお話 ～ 第三話（後書き）

どうも霧裂黒雨です

ちよっとオリジナルキャラクター出してみました。

ちなみにブライトはリアフレのGEBの名前とその本人の性格を模しました。

やっぱりしゃべり方が変ですね・・・

気にしないでください（殴）

GOD EATER BURST～NPCのお話～第四話

エントレス

上にアリサとソーマ
下にヒバリとリンドウ

「おっす！」

そういつてアルイカがエレベータから出てきた、手には缶が握られている。

「・・・生きてたか」

「一応な！それにしてもさ！これうまいな！本部にはこんなうまいもんねえよ！」

ソーマはアルイカの手握られている缶をよく見た。

失恋ジュース

いやなことを思い出した、今にで吐き気がしそうだ。

「なんかたくさん余ってるみたいだからさ、余っているの全部貰っちゃったぜ！」

いやゝ得した！こんなにうまいのになんであんなに余っているんだ

「？」

「買収されたか・・・」

「何がうまいって？」

そういつて下からリンドウが登ってきた。

「リンドウさん！これっすよこれ、いります？」

アルイカはそういつて腰のカバンからもう一本ジュースを取り出す。

「ああ、ありがとうな」

「バカ！飲むな！」

ソーマが止めるもリンドウはそれをフタを開け、中身を口に流し込む。

「ん・・・なんかいったか？」

「・・・大丈夫か？」

「んゝ大丈夫だ、確かにうまいなこれ！」

「だろゝ！まだまだあるぜ！」

「・・・・・・・・」

次の日

「めんどくさい……」

そう呟いたのはブライトである。

「そういうなって……この仕事のおかげでゲームやらアニメやらでkindる？」

「でもめんどくさいもんはめんどくさい……」

「たくつ……っでこれが今日のメンバーか？」

アルイカは後ろを向く

今エントレス上にいるのは、ヴァジュラミッションに行くメンバーである。

アルイカとブライトの他

アリサとソーマであった。

「はい、コウタは急用で家族のところに帰ってますし
リンドウさんは体調不良です。

たしか……お腹が痛いって言っていましたよ」

「あのバカ……」

「そうか・・・リンドウさんと一緒にミッション言ってみたかったんだが・・・」

まあいいかここでの初任務だ！よろしくな！」

「よろしくおねがいします！」

「・・・死ぬなよ」

「オ〜〜〜」

鉄塔の森

四人はそれぞれ別行動をしていた。

ここにヴァジュラがでるのはある意味珍しい

だからこそヴァジュラの行動場所がわからず、なかなか見つからなかった。

「・・・チツ、どこにいやがる」

ソーマは周りをよく見ながら鉄塔の森を歩いていた、

その時、目の前にブライトを見つけた。

その上を見るとオウガテイルがブライトを狙っていた。

「ブライト！！上だ！」

少し懐かしい感じがするが、今はそんな場合ではない。

ブライトが気がつき、上をみる。

口

オウガテイルの限界まで開かれた口がそこにあつた。

またか・・・

ソーマがそう思った直後だった。

ブライトは手に持っていた神器を剣形態から

銃形態に変え上に向けて爆発系バレットを放った。

その速さ0.1秒

オウガテイルはバラバラに碎け散る。

ソーマはその様子をポカーンと見ていた。

「仕事を増やすんじゃないやねえよただでさえめんどくさいんだから・・・
ああ早く帰りたい・・・」

ソーマはかつてカノンとミッションに行き

彼女の流れ弾に当たり言われた言葉を思い出した。

そして彼は思った。

人間以上に恐ろしいものはないと．．．．．

GOD EATER BURST〜NPCのお話〜第四話（後書き）

ちょっと名言入れてみました。

あと二ート最強説……

そしてリンドウさん……

恐らくリンドウさんは初恋ジュースの存在を知らないのでは
と思ひまして……出してみました。

あのジュースってきつとアラガミにはおいしいんでしょうね
リンドウさん右腕だけなので

味覚だけアラガミに近いという設定にしました。

GOD EATER BURST ～NPCのお話～ 第五話

ミッション内容

フィールド 贖罪の街

ターゲット ヴァジュラ（不確定）

ミッション時間 5時間

市街地にヴァジュラと思われるアラガミが出現

発見したのは一般市民で5人の内四名が捕食され

一人は片腕を捕食された。

目撃情報からヴァジュラと思われるが

翼があるという不可解な点もある。

新種の可能性があるのでコアを採取すること

それが今回のミッション内容である。

メンバーはリンドウ・ソーマ・アルイカ・アリサである。

「今日も死なずに帰るぞ！」

「行きましよう、アルイカさん」

「アルでいいよ。アルイカだと呼びにくいだろ？」

「アル・・・ですか・・・わかりました。」

「お願いします、アル」

「ああ！」

「死ぬなよ」

こうしてミッションが始まった。

四人は固まって行動していた。

相手が新種のアラガミならどういう攻撃をしてくるかわからない。安全を考えての行動であった。

しかし、ヴァジュラに似たアラガミは一向に出てこなかった。

「こうなったらもう散らばるしかないんじゃないか？」

アルイカがそう言い出した。

「んゝたしかにこのままじゃ見つからないかもしれないな」

「ですが・・・危険じゃないですか？」

「なら、なるべく目立たないように行動すればいい」

それでアラガミを見つけたら知らせればすむ」

「たしかに、ソーマの言うとおりだな、

よし、散らばって行動だ！」

「了解！！」

そうして四人は別々の方向に散らばっていた。

新種アラガミを探すアルイカ、手にあるのはハンニバルの炎の槍である。

「まだここらへんは地形把握していないから・・・どこにいるかもわからないな・・・」

アルイカは壁に張り付きながらゆっくりと進む。

「ん？」

何かが聞こえた。

アルイカは警戒を上げて動く。

今いる道は狭い道だ。

抜ければ恐らくは広い場所だと思われる。

アルイカはその細道から抜けた場所を覗き込む。

やはり予想通り広場であった。

その広場には・・・

アリサが倒れていた。

「アリサさん！」

アルイカはアリサに駆け寄っていく。

「アリサさん！」

「ア・・ル？」

その時だった。

後ろから爆発音が聞こえた、

後ろを振り向くとそこには大きな洞窟。

そこから煙が出ている。

その煙の中からリンドウとソーマが飛び出てきた。

「いいときに来た！どうやら手ごわそうだぞ？」

「気を抜くなよ？アル」

二人はすでにボロボロである。

同時に大地が揺れている。

洞窟内から何かが出てこようとしているようだ。

それはゆつくりと姿を現す。

それは情報通り、翼を生やしたヴァジュラだった。

「これりやまた、博士が見たらはしゃぐだろうなあ」

「何・・のんきなこと言っているんですか・・」

「アリサ、大丈夫か？」

「まだ・・いけます」

ヴァジュラが咆哮を上げる、

みんな傷ついている・・

俺が・・俺が！

「俺が戦う！」

アルはそういつて走り出した。

「おい！クソッ！」

「アルを援護してやれ！」

「はい！」

三人もまたアルに続いて走る。

アルは奇襲用の炎の槍を消して
戦闘用の炎の双剣を出す。

「うおおおおああああ！！！」

アルの体が少しばかり赤くなる。

それは赤いハンニバルである父から受け継いだ
ハンニバルの皮膚の鎧であつた。

その二つの剣でヴァジュラをバツに切り裂く。

やはりただのヴァジュラではない。

この剣ならヴァジュラに深い切り傷を与えるのは
簡単である。

しかし、再生能力があるのか、

改めてみたときにはすでにふさがろうとしていた。

「まああだあああ！！！」

一瞬で敵の背後に回り、

双剣の連続斬りを放つ。

流石に怯みはするものの、やはりすぐに再生してしまった。

「無茶するな！アル！」

リンドウが神機で斬りつける。

さすが今までリンドウと戦ってきた神機

その一太刀でヴァジュラは怯んだ。

「ソーマ！」

リンドウが叫んだ。

「こつちだ！」

上からソーマがプレデターモードで落ちてくる。

そして神機の口でヴァジュラの背中に噛り付いた。

ヴァジュラがまた咆哮を上げる。

その瞬間ヴァジュラの体が放電し始め、

雷の衝撃波が周りに放たれた。

それにより三人は吹き飛ばされる。

「リンドウさん！ソーマ！アル！」

アリサはすぐさま回復弾を三人に打ち込む。

新型である彼女の腕はたしかで

一発一発放たれた回復弾は見事三人にヒットした。

三人の体の傷がすぐに回復する。

「こりゃ・・・やっかいだな・・・」

みんな、よく聞け、

もう少し戦って無理そうなら

撤退だ。

いいか？これは命令だ。」

「ああ」

「わかりました」

「了解」

そういつて三人が突撃しようとしたときであつた。

どこからか矢のような形状をしたオラクル弾が飛んできた。

それはヴァジュラの頭部にヒットする。

その一撃で頭が吹っ飛んだ。

しかしすぐにそれは再生した。

「やはりすぐに再生してしまうか・・・」

色々とめんどくさそうなやつじゃ」

「ああ・・・」

四人はそのオラクル弾が飛んできたほうを見る。

二人・・・

若い少年と少女が建物の二階に立っていた。

少年のほうは黒髪ヘッドフォン

そして大きな弓型の神機を手にしている。

たいして少女のほうも黒髪ヘッドフォンで

両手には二つバスターブレードの神機を手にしている。

「両手にバスターブレードの神機！？」

女性の身なのに・・・ありえませんか」

「それに・・・弓型の神機なんて聞いたことないぞ？」

正体不明の二人のゴットイーターが降りてくる。

「ワシが行く。」

援護を頼んだぞ？

ひゃっしゅ
百鵠」

「ああ・・・」

「誤射したら許さんぞ？」

喝！」

そういつた瞬間、

双大剣の神機のゴットイーターの体が紫の光に包まれる。

そして・・・消えた。

突如ヴァジュラの悲鳴が聞こえる。

目を移すと先ほどの少女がヴァジュラの背中に立ち、

その翼を切り落としていた。

そしてそのまま飛び降りる。

「今じゃ！白鵠！」

四人は白鵠の姿を探す。

そして見つけた。

いや・・・今出てきたと言う所か・・・

まだ透明な部分がある白鵠がヴァジュラの目の前に現れた。

弓の先が紫の光を太陽の如く輝いている。

恐らく大量のオラクルが凝縮されているのだろう。

それに気がついたヴァジュラが体の向きを変えるが

すでに時遅し

弓の先から光が放たれた。

それはまさしく大口径のビーム砲であり、

放たれた光はヴァジュラを包み込んだ。

やや空を向いた放ったらしく

後ろは空に飛んでいった。

それが消えた頃にはヴァジュラはいなかった。

「やりすぎじゃ、白鵠」

「ああ、すまん・・・」

「まったく・・・」

「おい・・・君たち」

「ん？なんじゃ？」

「貴方達は何者なんですか？」

「ワシらか？」

ワシはむらさめ村雨 せつな雪那

こやつは弟のおにびな鬼雛 ひゃうじう白鵠じゃ
ん？

おぬしらは極東支部の神食らいかの？」

「そうだ。」

お前達は？」

「ワシらは極東支部に向かっている途中じゃ

すまんが案内してくれぬか？

そうしたらわけを話そう」

こうして、四人は正体不明のG・Eを極東支部につれて帰ったのであった。

続く・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0954q/>

GOD/EATER/BURST - NPCのお話 -

2011年10月8日13時19分発行